

資料4

人工ナッツの形状等に関する洗練化

上野 吉一（北海道大・実験生物センター）

平成6年度から共同利用研究として人工ナッツ、すなわちカプセル状の物の中に果実などの食物報酬を入れ、そのふたを開けることで報酬を得ることができるようにした物の確立を進めてき、平成8年度時点でチンパンジーが歯で噛み砕くことができず、かつ任意に開封難度が設定できるナッツを作成することができた。そこで本研究ではさらに、これまでのビデオの詳細な分析もとにナッツに対する反応や操作を検討し、形状などによる無駄な部分が少なくなるよう修正を加え、より本来の“ナッツ”に近い反応を引き出すことを目的として洗練化を図った。その結果、塩ビパイプ（商品名：エレクター）用のキャップ（外径 34 mm）を2個合せ、その継ぎ目をステンレスのベルトで覆うことで、形状的にも機能的にも優れたものを作ることができた。

本研究で完成した人工ナッツは、飼育下におけるナッツ割りの学習過程やその社会的伝播の解析など近い将来進められるだろう研究において有効なデバイスの1つとしての利用が考えられている。また、この方法をもちいることにより、味覚、嗅覚、視覚刺激に加え、「対象の操作」という因子をも任意に変化させることができ、かつより“自然”に近い採食行動場面で提示することができ、食物選択におけるの各因子の働きに関する検討が可能になるだろう。

また、人工ナッツのサイズの変更することで、チンパンジー以外の霊長類へも応用でき、実際オマキザルやマカクに用いることができるものも完成した。

資料5

霊長類学的側面から見た猿猴図データベースの猿たち

都守淳夫（犬山市・愛知）

猿猴図版の主題の階層分類と分類名辞を決めるため、本年は売立目録に所収された14世紀以降の作家250名の作品1500余点の猿猴図と、これに関連するかなりの現存の猿猴図関係資料とを通年的に、とくに画材である猿の形態と行動とを観察した。

1) 先史より平安期まで：茨城県出土植輪、長屋王井戸出土皿絵、正倉院閤欄屏風、鳥獣人物戯画、加えて大和絵の背景点描などには、ニホンザルが写実様に表現されている。「戯画」を除き物語性は薄い。正倉院資料では渡来猿の和様化がみられる。

2) 鎌倉期より室町期まで：宋元画の請来による漢画全盛の中に、牧溪を中心とする禅林周辺の猿猴図が愛好される。モチーフは「枯木猿猴」「母子猿猴」「臨流猿猴」「捉月猿猴」等であり、画材としての猿はニホンザルから牧溪様手長猿に置き換わる。

3) 桃山期より江戸期まで：上記の漢画猿猴図は、城郭寺院の障屏画や書院床間の軸物の画題として江戸末期まで描き続けられる。これには狩野派の確立と宗家に残された粉本の果たした役割が大きい。その中でニホンザルは「三猿」「三番叟」「栗引猿」「千匹猿」など伝統的画題で細々ながら描き続けられていた。しかし18世紀後半の、応挙や狙仙による近世リアリズムの台頭により、彼らはその生活を生きいきと展開しながら画幅に再登上する。狙仙では母子関係とコドモの成長過程が、応挙ではオス間の強弱といった社会関係がよく描き出されている。

4) 明治期より現代：狩野派の瓦解は猿たちを粉本的呪縛から開放し、作家は伝統的な画題に自由な解釈を与える。関雪の玄猿、光雲の老猿はその例か。